

姫路革の伝来

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

播磨の皮革・姫路革

牛皮を原料とする姫路革（又は姫路白鞣革）は、鹿皮を加工した甲州印伝と共にわが国に古くから伝えられてきた代表的な皮革である。その産地としては姫路市花田町高木が著名で、ここは日本の伝統的な製法の牛革誕生の地とか、あるいは、わが国皮革産業の発祥の地とか称されるところである。

高木地区は、瀬戸内海から直線距離で約9キロ上流の市川沿いにある。江戸時代の銀山で有名な生野方面を水源とする市川はJR姫路駅と御着駅とのほぼ中間を流れており、全体として流れは穏やかで、高木のところで大きく湾曲し、広い河原を形成している。

播磨地方では古代から製革業が行われていたことは、平安時代前期の法令集「延喜式」（詳しくは後述）の中で確認すること



白鞣革の天日干し

市川の河原で天日に晒す。手前から右方の丸革が白鞣革（昭和42年）

ができる。しかし、その産地が播磨のどこであったかについては、現在のところ明らかではない。しかし、少なくとも中世以降では、その生産の中心地は姫路地区であったと考えて良さそうである。その頃「播磨の革工能く熟革（なめしがわ）を物し、その品争いて当時の武士に求められる」といわれた（黒川真頼「工芸志料卷五」1910）。

姫路の高木地区はその生産の中心であって、姫路革、すなわち姫路白なめし革を産出してきた。これは原料の牛皮を川水に漬け、毛根部に発生するバクテリアの酵素の力で脱毛し、塩と菜種油を用いつつ揉み上げ、天日に曝^{さら}して薄乳白色の革に仕上げるもので、江戸時代中期には今に伝えられている方法が完成していたものと筆者は考えている。その技法の独自性、及び今日まで伝えられてきたという点でもこれは世界的に稀有なことであり、とりわけ、植物油をうまく利用する製革方法は現在姫路にしか伝わっておらず、貴重な技術的文化財と言ってよい。かつてこの革を用いた文庫・財布・バッグ・草履・小物類などは姫路の特産品として愛用されてきたが、現在店頭に出ているものは類似の外観を持つように加工した製品となっている。

四つの伝來說

その製革技術の始まりについてはいくつかの言い伝えがある。集約すると、四つの説になろう。

(1) **朝鮮伝來說** 地元では最もよく知られている伝説である。松本静吾著「姫路紀要」(1912)には次のように書かれている。「口碑の伝ふる所によれば、神功皇后三韓征伐の際俘虜中製皮術に長けたるものあり、初め但馬の円山川にて試製せしも水質適せず、依って南下して市川にて試みたるに大に良好なる成績を顕はしたり、故に之を師として其の技術を伝習したるは高木村民(太字化は筆者。以下同じ)にして、姫路革の名を以て世に著はれたるなりといふ、(此師の没後里人祠を建てて聖明神と号す、)」

(2) **聖翁伝授説** 岩田黙然著の「花田史誌」(1954)によれば「神功皇后三韓より御凱旋の砌、皇后の高徳を慕ひて出雲国古志村に上陸した新羅国人の中に、熟皮術に精通する者若干あった。最初出雲国簸川にて製皮を試みたが、水質適せず但馬国に移り、円山川にて試製したるに再び製革意の如くならず、更に南下して播磨に入り広峰山下の市川にて製皮を行った。然るところ水質好適にして良質の製皮を見ることが出来た。之によって彼等は広峰山麓に止住し、水質良適の松ヶ瀬村(高木村の旧名)にて製革の業を営むこととなった。…往時松ヶ瀬には松樹多く…就中神代木たる棕の木は幹廻り数丈もあって天に沖していた。その樹下に白髪の一聖人隠棲し、博識にして事物の諸般に精通す。里人呼んで聖翁(ひじりおう)と尊称し、厚く礼して崇拜していた。新羅の帰化人は此の翁について熟皮の技術を磨き、その指示に依って製り得たのが播州鞣革の濫觴である。」「翁の没後はその棕の木の下に小祠を建て聖大明神と崇めて翁の徳を偲んだ、これ即ち聖の宮(聖神社)の起源である。」

(3) **出雲国由来説** 大阪商工会議所「大阪商業史資料」(1955)には皮革産地形成に関する記述の後「越鞣(鞣)」の項に「コ

レヨリ先キ元禄年間ナリキ出雲国越村ヨリ来リテ革業ニ従事シヨリシ者(氏名伝ラズ)皮革韋法ヲ發明シテ之ヲ同業者ニ伝授セリ……ソノ晒ノ精粗ト水質ニ負フ処多ク当業者ガ堀江木津等ノ流レヲ以テ晒ラシタルモノハ純白トナラズ遺憾尠カラサリシガ数年ノ後ニ至リ播州市川ノ水質コレガ晒ラシニ適切ナル事ヲ発見シソノ沿岸ナル飾磨郡花沢(花田の誤り。筆者注)村ノ人民ニ計リテ試製セシニ好果ヲ納メ……同地ヨリ柔皮ヲ供給シツツアリコレヲ越鞣トイフ蓋越村ノ者が發明シタルニ因テ此ノ名アリ」とある。

つまりこの説は、出雲国由来というものの、まず大阪で製革してよい成果が得られなかった、そして市川で試したところ良かったから花田村民に教えたものだということである。これは明らかに地元の伝承とは異なっており、面白いところである。

また「明治工業史・化学工業編」(1925)収録の澤山智著「皮革工業」によれば「大阪地方に於ける鞣革の創始は、元禄年間雲州越村の人来りて伝授したるに始まりといふ、爾来尚ほ越鞣の名称伝へらるゝは全く此間の消息を説明せり」と述べている。ここでも前記の大阪の伝承と述べていることからすると、大阪の皮革産地ではこの様な説が言われてきたのであろう。

(4) **朝鮮伝來說異説** 高木の古老であった角谷静太郎翁は生前、昭和44~48年の間に製革業及び村の伝承について私的に三種の記録を残している。それらの記述から製革業の起源について要約すると次のようにまとめられる。「神功皇后に随行し帰化した新羅の四家族があった。製革の心得があり、出雲国越村では意の如き製革が出来ず、石見、長門を経て遂に福岡博多郊外で適地を見つけて製造をした。しかし、良品は得られず山陽道を東上、播州市川に着目、ここで製革業を始めたという。」

翁はさらに、その越村には昭和10年頃まで、博多には大正12年ごろまで白鞣業者がいたとも述べている。また、姫路市市川近傍の白国、四軒屋という地名は新羅や四大家族に関わりのあるものだと説明している。なお、筆者の確認では、出雲の越と言う地名は地図では古志と記されている。

四説の持つ意味合い

以上の説に多く共通するのは神功皇后・新羅人・出雲（越）・聖翁・「高ヶ瀬は高木の古称」そして市川であり、道筋は山陰からの南下と福岡経由とがある。なお、この元禄年間に伝来したという説に関連して筆者がかつて村の古老から聞いたこんな話がある。関東から移封されて15万石の姫路藩主となった酒井公が赴任したのは丁度その時期で、この酒井公が白鞣革の製法の導入に役割を演じたのではないか、というのである。今のところ筆者は何の裏づけも持ち合わせていないが、元禄時代というのは皮革技術の進展から見ると案外興味深い変化のあった時期なのかもしれない。

実際にはこれらの伝説が混合したような形で語り伝えられているが、それらを裏付ける具体的な史料は見られないようである。一方、製革技術史的な観点から考えると、現在の手法がそのまま昔からあったとは言えないので、むしろ千年余りの間の技術的変遷と結びつけることによって、その伝説が意味を持つてくるように思われるのである。これからの課題である。

播磨と皮革

牛革のように、動物皮の中でも大型で硬質系繊維の皮の加工技術は、鹿革に代表される中小動物皮のそれよりも歴史的には後世に始まったものと考えられよう。つまり、鹿革は最も古くから作られたものであり、牛・馬革の加工の始まりは、例えば日本書紀の仁賢紀にあるような製革技術者須流枳



江戸時代末期の古文書

高田家文書で、数少ない、当時の盛業を示す貴重な文書類（昭和43年）

（するき）・奴流枳（ぬるき）の渡来に深く結びついているのではないかと考えている。（注：しかし近年、この点については、動物考古学あるいは環境考古学の研究から筆者の唱える牛馬革説への疑問も出てきている。後日の機会に解説したい。）

皮革生産地の一つとして播磨の国名が史料にはじめて出てくるのは延長5（927）年に完成した「延喜式」である。

第一級史料の延喜式

延喜式について、虎尾俊哉著「延喜式」（吉川弘文館、1964）から簡単に紹介してみよう。「式」という語は、模範・規格・法律・節度というような語句に当り、「延喜式」の「式」はその中でも法律という意味で用いられている。わが国古代の律令時代における法典の体系は、唐と全く同一の律・令・格・式という形式をとっており、それはこの中の一つである。そして各官司が常に必要とする法令・規則で律令施行の助けとなるもの、または将来にわたって永久的な規定とするに足るものを式に入れている。式は多くの単行法令の結論だけを簡条書的に集めた形となっている。

延喜5（905）年8月、醍醐天皇より左大臣藤原時平に対して編纂の勅（詔）命が下り、作業が始まった。かなり紆余曲折の

後、22年もの歳月をかけ、延長5（927）年によろやく完成した。巻数にして50巻、全条数は約3,300条よりなり、延喜式は「非常に広い分野にわたっての古代史研究の宝庫」と言われている。皮革についても例外ではなく、皮革史研究上不可欠な根本史料となっている。

古代播磨は馬革の産地

同式の民部（下）の「交易雑物」の項には各種皮革の産地として、伊賀・尾張・参河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・阿房・上総・下総・常陸・近江・美濃・信濃・上野・下野・陸奥・出羽・越前・加賀・能登・越中・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・出雲・石見・播磨・美作・備前・備中・安芸・周防・長門・阿波・讃岐・伊予・紀伊及び大宰府の43カ国が上がっている。この内最も多いのが鹿皮類の35カ国、牛皮類として特定できるのが14カ国（国数は種類ごとに数えている）で、他にも皮革の種類がある。この他「諸国進馬革」では尾張・近江・美濃・但馬・播磨及び阿波の6カ国があつて、合計100張の貢進をしている。その内、播磨は32張を占め、最大の産地となっている。また、鹿革では参河（三河）・武蔵及び上野の各60張に次いで、播磨は伊予と並んで50張を産している。即ち、当時の播磨は馬革・鹿革の産地で、牛皮革類の産地としては名前が出ていない。

この頃の皮革の用途は、祭礼用のほか、履・鞍・馬具・甲冑・筥（箱）・敷物・衣類・腰帯・刀剣・弓道具・紐・装飾品及び吹皮（鞆・ふいご）などであった。

当時の原料馬皮の供給に関する前田和之「古代の皮革」（『古代国家の形成と展開』1976）によると、皮革産地と「諸国牧・御牧の所在地と一致する例は見当たらず、近江・美濃・播磨など駄馬・伝馬の死皮にそ

の供給源があつたことが推測される。」

しかし、播磨の皮革生産が当時どこで行われていたかについて特定できる材料は何もないが、動物皮を革に加工する場合、なま皮で鮮度を保持することが極めて難しいことから、死馬皮を回収すると直ちに革までの処理をするか、あるいは塩蔵保存もしくは乾皮として保存もしくは輸送して一定の加工場で処理したことが考えられる。

播磨風土記との関わりは否定的

高木地区で早くから製革業のあつた証の一つとしてよく引き合いに出されるのは播磨風土記の^{しかま}飭磨郡小川里の項である。（筆者注：文中の…は省略部分）

…故号私里。…改為小川里。…所以称高瀬者。品太天皇、登夢前丘、而望見者、北方有白色物。勅伝、彼何物乎。即遣舍人上野国麻奈昆古令察之。申伝、自高处流落水、是也。即号高瀬村。

この文中の白色物は熟皮を日晒にしているのを指すという説（花田史誌、及び今井啓一「姫路鞆について」『日本上古史研究』1962）、そういう理解は不相当とする説（山田猛「古代播磨と生産技術」1987）、疑問視する説（花田史誌）など様々述べられている。しかし、市川の流^{ほんだ}れの変遷や地形、夢前丘からの遠望の難しさ、品太（応神）天皇の時代に皮革産地を忌避する思想もなかったこと、さらに遠望して白く見えるほど大量の皮革生産が当時の社会で行われていたとは考えにくいことなどの理由から、この風土記の記述と市川流域の皮革生産を安易に結びつけることには賛成できない。

いずれにしても、播磨における皮革の歴史の古いことには変りがない。しかも、姫路白鞆革という世界的に見ても貴重な技法を伴っているのである。しかし現実には、その技術の伝承に危機感を抱かざるをえない状況に至っている。